

第8回国際日本学コンソーシアム

—食・もてなし・家族Ⅱ—

趣旨説明と総括

古瀬 奈津子*

今年度の国際日本学コンソーシアムは、2008年度の第3回に引き続き、「食・もてなし・家族」を統一テーマに行われました。

国際日本学コンソーシアムは、文部科学省の「魅力ある大学院教育イニシアティブ」に採択された「〈対話と深化〉の次世代女性リーダー育成」の一環として、2006年12月に第1回が開催され、今年で第8回を数えます。本学と交流協定を結んでいる世界の日本学研究の拠点である8大学から教員および大学院生をお迎えして、国際的・学際的なジョイントゼミを行い、日本学研究および教育の世界的ネットワークを構築することを目的としています。

4年前に大学院GPは終了しましたが、今年は独立行政法人日本学術振興会学術研究動向調査等研究費を使用して、例年より多くの国から教員や大学院生の方たちに参加していただき、開催することができました。今年新たに参加して下さったのは、南カリフォルニア大学、ミネソタ大学、カリフォルニア州立大学、INALCO（フランス国立東洋言語文化研究学院）、パリ第四大学の教員や大学院生の方たちです。

国際日本学コンソーシアムは部会を設けて、専門性を追求するとともに、部会を超えた統一テーマを設定し、学際性をも追求していますが、今年度のテーマは、2008年に続いて、「食・もてなし・家族」Ⅱでした。今年、和食がユネスコの無形文化遺産に登録されたので、時宜を得たテーマ設定になったと思います。

2008年度は、7月の国際日本学シンポジウムも

「人類・食・文化」をテーマに行われ、農学・食物科学からも講演があり、文理融合のはしりのシンポジウムとなりましたが、当時はまだ人文系の分野において「食」はテーマとして積極的に取り上げられることは少ない状況だったと思います。

その後、東日本大震災などの影響もあって、「食」は日本の社会全体にとって重要な課題となってきています。さらに、和食が世界的に健康的であるとして注目を集めています。そのこともあって、和食はユネスコの無形文化遺産に登録されました。

2008年度の時は、「食」が国際日本学コンソーシアムのテーマとしてふさわしいかという議論もありましたが、今回はそのような問題は起こりませんでした。そのことから、「食」への関心の普及をうかがうことができます。

国際日本学コンソーシアムでは、部会方式で講演や発表を行っていますが、今年度は、日本文化部会Ⅰ（思想・文化）、日本文化部会Ⅱ（日本史）、日本文学部会、日本語学・日本語教育学部会、全体会という構成で行いました。

また、国際日本学コンソーシアムは教育上の理由から、統一テーマで講演をしていただくのは教員が主で、大学院生は各々の研究テーマで発表してもよいことになっています。そのことに留意しつつ、今回の講演や発表の傾向をみていくと、日本文化部会Ⅰ（思想・文化）においては、もてなし、食に関する講演や発表が行われました。日本文化部会Ⅱ（日本史）では、家族に関する講演、日本文学部会においては、食、もてなしに関する

* お茶の水女子大学大学院教授、本センター長

講演が行われました。ただし、2008年度には、歴史学部会においても、「食」に関する講演や発表が行われていましたから、部会によるテーマの取り上げ方の違いは、分野による違いと言うより、講演や発表する個人の関心の違いと言った方がよいかもしれません。

しかし、特徴的だったのは、日本語学・日本語教育学部会で、講演者・発表者の多くが「食」をテーマとしていた点です。畑佐一味先生（パデュー大学）は、日本の食と食文化を素材とした日本語の教材作成について講演されました。本センターの客員研究員であるポリ・ザトラウスキー先生（ミネソタ大学）が「食」を研究テーマとして

いる日本語学研究者であることもあって、日本語学・日本語教育学部会の講演や研究発表は「食」に関するものが多く、討論も活発に行われました。また、全体会には、ポリ先生の研究協力者である本学食物学科の香西みどり先生も駆けつけ、文理融合の立場から発言されました。

2008年に始まった「食」に関する国際日本学的研究が、先生方やスタッフの方たち、院生の人たちによって継続されていることを確認できたことも、今回のコンソーシアムの大きな収穫であったと思います。今後も、コンソーシアムを基盤にして、国際日本学の研究が進展していくことを願っております。